まえがき

講堂の壇上にはスーツに身を包んだ「海外駐在員」が、マイクを片手に並んでいた。

あの日、大学生だった私は、就職活動に向け企業説明会に参加していた。企業から派遣された社会人たちが、就活生に向けて自分たちの仕事を説明する一大イベントだ。

司会者からマイクを渡された、ある商社の担当者が、海外での武勇伝を語りはじめた。「僕はアフリカの事業で何十億もの金額を任されていました。アフリカの文化と格闘しながら、これだけの成功を収めたのです」それを聞いた私たちはどよめいた。「海外で働く企業戦士。なんてまぶしい世界なのだろう。私もこんなふうになりたい」あのとき、憧れのまなざしで彼らを見ていたのは、私だけではなかったはずだ。会場の全員が、彼らを見ていた。

彼らしか、見ていなかった。壇上には、彼らしかいなかったのだから。しかし、今、私がその講堂にいたとしたら、私から見えるのは、その商社マンではないだろう。

その横に立つ、

彼らの家族。

彼らの妻。

その姿は、誰からも見えないけれど、私にははっきりと見える。

「駐在妻」の彼女たちが、凛として、彼らの横に存在していることを、私は知っているから。

私の夫は海外駐在員です。

彼について、韓国、中国、アメリカと12年にわたる駐在生活が続いています。そのなかで、退職、妊娠、出産、育児、加齢と、私のライフステージは刻々と変化してきました。現在は、アメリカで「MIKARIAN LLC」を設立し、世界中の駐在妻の心を支えるべく、30日間のメールコーチングやInstagramでのラジオ配信などを行っています。

自分の人生が、国をまたいで進んでいくことを、人はうらやましいと思うかもしれません。私も今ではそんな自分の生活に誇りを持っています。しかし、今日に至るまで、私は「この先どうなるのか」という不安とともに歩んできました。

私のような「駐在妻」は、住む国も、住む期間も、移動する時期も、すべて夫の仕事によって決められます。もちろん不自由のない生活を整えてもらえることには感謝してもしきれません。ただ、自分の意思とは無関係に変化する環境に、「自分の人生が自分で決められていない」という苦しさも感じていました。

華やかに見られる駐在妻の世界。人生の悩みが、波のごとくやってきたこの12年間を通して、その「駐在妻」の世界を知っていただきたいと思います。そして、世界のどこかで今日も頑張っている駐在妻のあなたが、この本を読んで、少しでも海外で気を楽に過ごしてもらえたら、とも願っています。